

アイルランド人水夫コリンズ兄弟と明治初期の帝国海軍教育

堀江 洋文

アイルランド共和国第2の都市コークの南14キロにカリガライン (Carrigaline) の町がある。アイルランド南部地方マンスターにある何の変哲もない人口1万5千人程の小さな町であるが、町の中心に位置するカリガライン橋近くに日本語、英語、ゲール語で書かれた記念碑が置かれている。アイルランドで唯一の日本語で書かれた碑とのことであるが、1994年に当時の駐アイルランド大使古川清氏によって除幕されたこの記念碑は、日清戦争前の大日本帝国海軍の砲艦技術向上等に貢献し明治政府から叙勲を受けたこの町出身の双子の兄弟、ジョン・コリンズ (John Collins) とコーネリアス・コリンズ (Cornelius Collins) を称えて建立されたものである。¹⁾ 記念碑には、「ジョン コリンズ及びコーネリアス コリンズ兄弟の功績を記念して1851年カリガライン町フレッチファーズに生誕1888年8月8日その功績に対し大日本帝国天皇は同兄弟を勲六等に叙し単光旭日章を贈与した」と記されている。

記念碑建立の一年前、ショーン・オマホニ (Sean O'Mahony) によってカリガラインの町史 *A Gateway to the Past — The History and folklore of Carrigaline* が上梓されたが、このアマチュア地方史家による労作は、アイルランド国内でも優れた教区史 (parish history) の著作の一つとして評価が高い。この著書の中で、コリンズ兄弟に関しては第12章 (The Japanese Connection) にまとめられている。アイル



カリガラインのコリンズ兄弟記念碑。ゲール語と日本語、裏には英語でコリンズ兄弟の簡単な紹介がある。

¹⁾ 防衛省防衛研究所所蔵のコリンズ兄弟に関する日本側史料の検索に関しては、初期の調査段階で現防衛省防衛研究所戦史研究センター長の庄司潤一郎氏の助言を得た。アイルランド側の写真資料については次の方々からの提供を受けた。Charlie O'Donnell (元アイルランド海軍大佐)、Dr. Katherine O'Donnell (アイルランド国立大学ダブリン校教授)、Prof. Colbert Kearney (元アイルランド国立大学コーク校教授)、Mary Morrissy (同講師)。

ランド南東部にあるウェックスフォード市のクレッセント埠頭には、1963年のアイルランド訪問時に故ケネディー米大統領も花輪を奉げた「アメリカ海軍の父」ジョン・バリー（Commodore John Barry）の記念碑があり、アイルランド西海岸のメイヨー州フォックスフォードは、南米に移住しアルゼンチン海軍提督となったウィリアム・ブラウンの出身地である。²⁾ ブラウンはアルゼンチンのスペインからの独立戦争で活躍し、「アルゼンチン海軍の父」と呼ばれた。彼の銅像は、ブエノスアイレスとダブリンの両市に建立されている。コリンズ兄弟は英国海軍の一員として日本に派遣された時は俊秀水夫（seaman）の階級であったが、教育・訓練を通じての彼等の大日本帝国海軍への貢献度は、上記二人の海軍高官に決して劣るものではない。1800年の「連合法」（Acts of Union 1800）によってアイルランドが連合王国に事実上併合されて以来、アイルランド人のアジア諸国における活躍は大英帝国の枠組みの中で見られることが多かったが、英国海軍の一員として日本に派遣されたコリンズ兄弟もそのような事例の一つである。³⁾

コリンズ兄弟が日本で活躍した1870年代から80年代にかけては、アイルランドへの自治権付与問題が持ち上がった時期であり、アイルランド自治運動の指導者パーネル（Charles Stewart Parnell）が、自由党指導者で英国首相となったウィリアム・グラッドストンを動かしまた彼と協力してアイルランド自治法の成立を試みたが、最終的に英国議会上院で否決された頃である。所謂ホーム・ルールを目指す運動（Irish Home Rule Movement）であるが、これはグレート・ブリテン王国とアイルランド王国の合併（事実上前者による後者の併合）を定めた1800年の連合法の一部を廃止するものであり、廃止の是非を巡っては英国議会で激しく議論された。ホーム・ルールは、アイルランドのナショナリズムとイギリスとを何とか和解させようとの試みであったが、保守党はもちろんのこと、一部にアイルランドの不在地主階級を抱える自由党内のホイッグ派の反対も強かった。上院での自治法案否決も当然予想された動きであったと言えよう。さらに17世紀にイングランド、そして特にスコットランドからアイルランドに移住した入植者の子孫であるプロテスタント系住民は、カトリック系住民が多数を占めるアイルランドにホーム・ルールが成立することで少数派に転落することを恐れ、ホーム・ルールに反対する強力な運動を展開した。このような傾向はアイルランド島の32州のうちプロテスタント住民が多数派を占める北部のアルスター地方の6州で強かった。アイルランドの自治に向けて活動するナショナリストと、英国への帰属を希求するユニオニストが激しく対立していったのもこの時期からである。一方本稿の主人公コリンズ兄弟は、このようなアイルランド

²⁾ Sean O'Mahony, *The History and Folklore of Carrigaline* (Shannon Park, 1993), p. 201.

³⁾ 例えば、19世紀から20世紀中期にかけて大英帝国という枠組みの中でのアイルランド人のインドにおける活躍については、拙稿「インド・アイルランド関係と大英帝国」『専修大学社会科学研究所月報』No. 614, pp. 1-34を参照されたい。

自治に向けた動きとは無関係に英国海軍で帝国の一員としての任務に就いていくのである。英国海軍内部は、特に訓練中の水夫にとっては極めて隔離された世界であり、しかも遠く極東の異国に渡ろうとしているコリンズ兄弟にとっては、アイルランドの自治や独立に向けた動きがどのような展開を見せているかということは、脳裏をよぎることはあっても全く別世界の出来事のように思われたことであろう。

14歳で初等教育を終えたコリンズ兄弟は、ヴィクトリア女王が訪問したことからクインズタウンと呼ばれる生家近くのコーヴ (Cobh) の町で、1865年11月13日に英国海軍に入隊する。年齢のこともあり父親パーソロミュー・コリンズが同伴しての入隊手続きがあり、入隊志願書には父親の同意が記されている。本来英国海軍の一般入隊は18歳からの10年間であるが、コリンズ兄弟には18歳に至るまでの3年7ヶ月が付け加わり、合計で13年7ヶ月間に及ぶ海軍での勤務契約となった。数日後英国海軍艦船 H.M.S. 「ヘイスティングス」に乗船し入隊時に必要な儀礼的職務を終えた後、コリンズ兄弟は H.M.S. 「ナーシス」に移され訓練が始まった。彼らは艦船と当地の海軍学校を行き来して1872年12月まで訓練を受けることとなる。入隊から訓練に至るコリンズ兄弟の記録は、わずかではあるがロンドンの Public Record Office (PRO) の海軍記録部に保管されている。当時海軍学校は、コーヴの目と鼻の先に位置するホールボーリン島 (Haulbowline) にあった海軍ドックや補給基地と連携してあらゆる訓練を施していた。コーヴにも英国大西洋艦隊の司令部が置かれ、さらにホールボーリン島を挟んで湾の対岸に位置するリングスキディ (Ringaskiddy) の海軍埠頭には訓練船が停泊し、ここでもさらなる訓練が新米水夫達に施された。訓練の内容は水夫としての必要事項のみならず砲術や航海術の分野まで及んだが、その後の兄弟の大日本帝国海軍での活動を見ると、この時期の砲術訓練が日本の水夫に砲術技術を伝播するに際し大いに役立ったと思われる。⁴⁾ コーヴや上記訓練施設が点在するコーク・ハーバーは、現在では小規模ながらアイルランド海軍の基地が存在する。ホールボーリン島には現在アイルランド海軍の司令部が置かれており、コーク・ハーバーの真ん中には、かつて修道院として始まり、その後は軍の施設や監獄として使用されたスパイ

⁴⁾ O'Mahony, *The History and Folklore of Carrigaline*, pp. 203-6. ホールボーリン島の要塞化が始まったのは1602年であるが、その後同島はしばしば放棄され軍事的重要性を持つには至らなかった。しかし、これまでアイルランド南岸の英国海軍基地として重視されてきたキンセールが1790年頃には手狭となったため、天然の良港コーク・ハーバーに位置するホールボーリン島に英国海軍補給基地と病院施設が設けられることになった。1807年から18年にかけて倉庫棟が建設され艦隊補給の役割を担い、そのうちの1つの建物が英国海軍病院となった。その他に一連の煉瓦作りの建物が建てられ、そこには熱帯感染症対応の病院が併設されることになる。後述の帝国海軍の遣英艦隊関係者が訪問したのはこれらの病院施設の1つであろう。1845年から47年にかけてのアイルランド大飢饉時には、同島はアメリカからの救援穀物の集積地としての役割を果たしている。同島の簡潔な歴史については、<http://tradsail.ie/haulbowline.html> を参照されたい。さらに第1次世界大戦の終盤には、英国を支援するアメリカからかなりの数の艦艇がホールボーリン島に碇泊し、同島は援助物資の荷揚げ地として重要な役割を果たしている。<http://www.passagewestmonkstown.ie/haulbowline-island.asp> には、島の上空からの鮮明な写真がある。



上空から見たコーク・ハーバーとホールボーリン島（手前）。左上がスパイク島で、その上は湾の入り口。右上はリングスキディ



ホールボーリン島の中心、ロイヤル・アレキサンドラ・ヤード。建物は倉庫として使われたが、現在はアイルランド海軍のオフィス

ク島がある。コーク・ハーバーは、運命の大西洋初航海に出る前のタイタニック号が最後に停泊した寄港地としても知られる。コリンズ兄弟にとって故郷の近くにこのように優れた海軍訓練地が提供されていたことは幸運であり、彼らのその後の英国海軍での活躍を約束するものであった。しかし、彼らもまさかその活躍の場が、故郷から遠く離れた極東の地になろうとは予想すらしなかったであろう。

1. 幕末・明治初期の海軍と外国海軍顧問団の受け入れ

幕末期、幕府は西洋式海軍の制度導入に際して、当初はその範としてオランダ海軍を選定している。幕府はオランダとは鎖国中も通商関係を維持し、またオランダも日本に対して開国と同時に海軍の創設を強く働きかけた経緯があった。実際長崎奉行は、オランダ商館長のドンケル・クロチウス（Donker Curtius）を通じてかなりの数の軍艦・汽船を発注している。幕府は長崎に海軍士官養成のために長崎海軍伝習所を設置し、オランダ海軍の航海術書を使って教育が行われた。伝習所には佐賀藩を中心に諸藩の伝習生が集い、オランダ人教官も招聘して一時はかなりの伝習生を集めている。オランダ海軍中佐ファビウス（G. Fabius）を中心としたオランダ海軍の教育団は、長崎に到着すると早速意見書を作成し、海軍創設のためには艦長から一般水兵に至るまでまず人作りが大切であることを提唱している。佐賀藩が 48 名と伝習生の人数において突出しているが、佐賀藩の伝習生は数理に強く、また蘭学の初歩も学んでいた。佐賀の蘭学寮で学んだ中牟田倉之助等はその代表である。このように長崎でのオランダ海軍による伝習は、幕臣あり諸藩士ありで、近代海軍建設を標榜した人材のるつぼのような状態であり、彼らが新政府による海軍創設の基礎を担ったことは言うまでもない。⁵⁾ しかしその後、江戸からの距離を考えて幕府は築地の軍艦操練所を整備して、1859 年に長崎の伝習所は閉鎖されている。オランダ人教官帰国後、幕府海軍が外国人教官を雇い入れることはなかったが、戊辰戦争直前に招いた後述のトレイシー顧問団が唯一の例外と言えよう。この長崎海軍伝習所で学んだ伝習生の 1 人が、本稿の主人公コリンズ兄弟が属したダグラス顧問団を海軍兵学寮で迎えた佐賀藩の中牟田倉之助であった。中牟田は伝習所で学んだ後佐賀藩に戻り、三重津海軍所で佐賀藩海軍方助役を務め海軍の発展に寄与する。後に中牟田は日本海軍の創設者の 1 人に数えられるようになり、日



新橋演舞場近くの海軍兵学寮跡地にある碑

⁵⁾ 篠原宏『海軍創設史 イギリス軍事顧問団の影』リポート、1986年、16-46頁

清戦争直前には海軍軍令部長の要職に就くが、徹底した非戦派であったことが災いし解任されている。しかし、次章で詳述するように、中牟田が築地の海軍兵学寮においてアーチボルド・ルシアス・ダグラス中佐 (Archibald Lucius Douglas, 日本の公文書ではドーグラスとの記載が多い) をはじめとする英国海軍顧問団員と良好な関係を維持し兵学寮改革を推し進めたことは、帝国海軍教育の礎を築く上で大きな意味をもっていたと言えよう。中牟田の友人であった高杉晋作の日記では、中牟田が航海術と英語に長けていたことに触れられているが、当時の日本では最も進んだ海軍教育を受け英語も堪能であった中牟田は、ダグラス顧問団に対応するには最も相応しい人材であったのかも知れない。⁶⁾ 1857年に幕府は築地講武所に軍艦教授所を設置し、長崎伝習所で学んだ者の一部をここに集めている。その後軍艦教授所は海軍操練所と改称され、この操練所が明治政府による海軍操練所となり、後に海軍兵学寮となるのである。⁷⁾

70年(明治3年)10月2日、明治政府の太政官は、以後兵式を、陸軍はフランス式、海軍は英国式とするとの布告を出している。このことはお雇い外国人を招聘する場合も、海軍は英国から顧問を招くことを意味していた。⁸⁾ 前年の69年頃は、兵部省幹部の間で海軍の兵式を英国とオランダのどちらにするかとの議論があったから、最終的に明治政府が英国式を採用した背景には、当時英国海軍が最強の海軍であるとの判断があったと思われる。オランダ式から英国式に海軍教育を変更した背景には、単にオランダ海軍よりは英国海軍の方が総合点において高く評価されたくらいの理由しかなかったようである。⁹⁾ 17世紀にオランダ海軍を率いて蘭英戦争で活躍したミヒール・デ・ロイテル (Michiel de Ruyter) の時代は、既にこの頃には遠い過去の栄光の歴史となっていた。明治維新を経て殖産興業、富国強兵にひた走る明治新政府にとって、海軍力の増強は喫緊の課題であった。海軍の建設増強整備の必要性が真剣に議論されていたことは、既に71年に兵部省から駐英日本公使宛に出された文書でも明らかである。篠原宏著『海軍創設史 イギリス軍事顧問団の影』の第9章には「英国海軍顧問団 (British Naval

⁶⁾ 高杉晋作は幕府が派遣した貿易視察団の一員に加わり、1862年千歳丸で上海に渡りそこで短期間逗留する。上海で高杉や中牟田等は上海租界の繁栄に驚嘆する一方で、彼らが目にしたのは西欧列強の圧迫を受ける清の衰退であり、列強による清国植民地化の危機であった。横山宏章「文久二年幕府派遣千歳丸随員の中国観—長崎発中国行の第1号は上海で何を見たか—」『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』第3号、197-206頁。高杉は日記「遊清五録」を著すが、その中の「上海淹留日記」に中牟田の航海術の知識や英語力に関し次のような記載がある。漢文はメモ書きで高杉や中牟田の行動が理解できる程度の簡潔な記述である。「(五月)十一日、官吏至官船、与陪從、午前帰館、午前官吏皆外行、与中牟田在館、共論航海有益之事、中牟田云、欲爲航海學凡有之科課程、運用術、航海術、蒸氣術、砲術、船造術是也」(五月)廿日、朝與中牟田至亞米利加商館、商人名チャルス、透与二人至其居室、チャルス曰、我掩留横濱三四年、少解貴邦語、明後天出航、又欲至貴邦、甚慕貴邦人、遇与二人以佳酒、中牟田解英語、談話分明、聞奇問、得益不少」奈良本辰也監修、堀哲三郎編集『高杉晋作全集 下』新人物往来社、144-9頁。

⁷⁾ 影山昇『海軍兵学校の教育』第一法規、3-8頁。

⁸⁾ 1868年から1900年までの各種分野でのお雇い外国人数を総計すると、英国系の雇用者数は延べ4353人、次いでフランスが1578人、ドイツが1223人、アメリカが1213人となっており、英国からの雇用者が突出している。Hazel Jones, *Live Machines: Hired Foreigners and Meiji Japan* (Tenderden, Kent, 1980), pp. 148-9; イアン・ニッシュ編『英国と日本 日英交流人物列伝』博文館新社、2002年、33頁。

⁹⁾ 篠原宏『日本海軍お雇い外人』中公新書 893 (1988年) 114-8頁。

Mission)」に関する記載があるが、同章には兵部省から駐英公使に出されたこの文書の写しが掲載されている。この文書から、顧問団招聘の経験のない新政府は、旧幕府が幕末に招聘したトレイシー顧問団 (Tracey Mission) の条件に準じて日給を提案していることが理解できる。¹⁰⁾ トレイシー顧問団は幕府が英国海軍に派遣依頼した軍事顧問団で、リチャード・トレイシー (Richard Edward Tracey) 中佐以下 12 名の士官及び下士官からなり、彼等は 1867 年に来日し築地の軍艦操練所の教官を務めている。しかし、英国等欧米 6 カ国の公使団は戊辰戦争勃発に際し局外中立を宣言したため、顧問団は翌年には帰国している。戊辰戦争に至る混乱した幕末の状況下では、トレイシー顧問団による本格的な軍事教育が行われることはなかったと推察できる。

明治期に話しを移せば、篠原は、英国からの顧問団を受け入れる発議は、明治 7 年に海軍のナンバー 2 である海軍大輔になった川村純義によってなされたと主張する。維新後海軍は薩摩藩がその実権を掌握する中、川村はその中心的人物として活躍する。彼は同じ薩摩出身の東郷平八郎とほぼ同年代であるが、東郷が海軍大将に昇進し連合艦隊司令長官になった 1904 年に死去し、戦死以外では海軍史上初めて死亡後海軍大将に昇進している。明治期に外国からの大型軍事顧問団を再度招聘する契機になったのは、英国海軍からの雇入れ第 1 号となったアルバート・ジョージ・ホース (Albert George Hawes) 大尉招聘の成功であった。後述する海軍兵学寮の英語教師であったバジル・チェンバレン (Basil Hall Chamberlain) は、ホースが砲術や海兵訓練の他に多方面にわたって活躍し、「日本海軍の真の父」であったと評している。来日当初佐賀藩や熊本藩海軍のお雇い外国人として働いていたホースは、70 年 (明治 3 年) から新政府の海軍と雇入れ契約を結んでいる。ホースは、専門の砲術指導だけでなく海兵隊の創設や練習艦「マラッカ」(後の「筑波」) の購入に貢献した他に、艦内諸規則の整備等に関する意見書を兵部省に提出し、初期の明治海軍の整備に大きな影響を及ぼしたとされる。¹¹⁾ 「軍艦刑律」「海軍信号」「艦長職務」「副長職務」「士官職務」「医官職務」の他に「航海日誌」等の日誌に関しても、ホースは英国海軍規則の翻訳ではあるが明治海軍に建策し、彼の提言の殆どが採用されている。砲術指導だけでなく、英国海軍規則を帝国海軍に導入することに尽力したホースの功績は大きい。¹²⁾

¹⁰⁾ 篠原宏『海軍創設史』255-6 頁。

¹¹⁾ 篠原宏『日本海軍お雇い外人』120-7 頁。

¹²⁾ 篠原宏『海軍創設史』222-5 頁。

2. ダグラス顧問団の招聘とコリンズ兄弟

ここで、オマホニの記述と篠原の『海軍創設史』にある詳細を比較し、さらに防衛省防衛研究所等に保管されている史料を参考にしながら、アーチボールド・ダグラス中佐が率いた英国顧問団、そしてコリンズ兄弟の日本での活躍を精査してみたい。オマホニの記述を見ると、英国顧問団に関する彼の情報源は、事実上海上幕僚長に次ぐ地位である自衛艦隊司令官であった故齋藤國二郎氏であった可能性が高い。帝国海軍兵学校 70 期生の齋藤は、自衛艦隊司令官に就任する前に、練習艦隊司令官や護衛艦隊司令官を歴任し、1976 年 3 月からは自衛艦隊司令官着任直前の 77 年 8 月まで海上自衛隊幹部学校長に就いている。司令官や幹部学校長期の激務を考えると、オマホニが触れている防衛研究所戦史部（オマホニの著書では、The Military History Division of the Japanese Defence Forces）等での齋藤の明治期史料の本格調査は、79 年 1 月の退職後に行われたと思われる。もちろん幹部学校がある防衛省目黒地区には防衛研究所が隣接していることから、幹部学校長時代から史料への何らかのアクセスがあったのかも知れない。

日本滞在中の英国海軍顧問団ダグラス中佐は、イギリス中国艦隊 (British Commander-In-Chief China Station) に対してではなく、日本の海軍大臣に対して責任を負っていた。¹³⁾ その点からしても、彼の滞日期は日本の海軍士官や水兵の教育に専心した教授期間であったと言える。この顧問団が日本に向けて出発した時コリンズ兄弟は 23 歳であった。34 名からなる英国海軍顧問団の人員の中にコリンズ兄弟の名前が確認されている。兄弟とも階級は俊秀水夫であったが、篠原によれば職種はコーネリアスが砲術指導、ジョンは後述する「富士山」「肇敏」という 2 つの艦船の乗組員に対する航海術及び操船術訓練・指導であったようである。一方オマホニは、ジョンが砲術を指導し、コーネリアスが操船術を教えたと逆の指摘をしている。¹⁴⁾ 後述するように、コリンズ兄弟は他の英国顧問団員と並んで叙勲の榮譽を受けるが、その時の賞勲局の記載史料では、ジョンは浅間艦教師、コーネリアスが富士山艦教師となっている。しかし、海軍省の公文備考では、ジョン、コーネリアス両名ともに富士山艦への乗組が確認される。77 年 3 月 31 日にダグラス顧問団ナンバースリーで測量士官であったチャールズ・ベイリー (Charles W. Baillie) から中牟田少将宛に「四月二日月曜日ニ富士山艦へ乗組候様ジョン・コリンズ及マーク・アップス両名へ相達候」との報告があり、それを同日中牟田は東海鎮守司令長官に「富士山艦水兵教授之為ノ兵学校教師コリンズ及アップス両名来ル四月二日同艦へ乗組

¹³⁾ Ian Gow, 'The Douglas Mission (1873-79) and Meiji Naval Education' in J.E. Hoare, ed., *Britain and Japan: Biographical Portraits*, vol. 3 (Routledge, 1999), p. 150.

¹⁴⁾ 篠原『海軍創設史』262-3 頁; O'Mahony, *The History and Folklore of Carrigaline*, p. 209.

可申旨其筋ヨリ届出候条為心得此旨相達候也」と伝えている。¹⁵⁾ 富士山艦へのジョン・コリンズの乗組は、適応水夫であったマーク・アブス (Mark Abbs、海軍省公文備考や公文原書ではアブスと記載される場合もある) との言わばコンビを組んでの乗船であった。コーネリアスの富士山艦乗組に関しては 5 月 28 日付で同じくチャールズ・ベイリーから中牟田宛への書簡の中で『『コルネリアス・コリンズ』ハ富士山艦ニ滞留可致都合ニ仕置候』と報告されている。¹⁶⁾ このことからコリンズ兄弟は、ほぼ同じ頃に富士山艦に乗船し日本人水兵達に訓練を施していたと思われる。また後述する賞勲局の叙勲に関する史料をみると、叙勲史料は 87 年、88 年のものであるが、ジョン・コリンズは浅間艦教師、コーネリアス・コリンズは富士山艦教師の記載がある。¹⁷⁾ おそらく兄弟ともに派遣された各艦において、砲術から操船術に至る広い範囲の知識を帝国海軍の生徒に伝授していたと考えるのが自然であろう。ところで、ニューヨークで建造された「富士山」(ふじやま、排水量 1000 トン) は、71 年 (明治 4 年) 6 月に海軍兵学寮の練習艦に指定されているが、80 年に繋留練習船となり、85 年 12 月には運用術練習艦となっている。フランスで建造された「浅間」(排水量 1422 トン) は、74 年に浅間艦と改名されて後に砲術、航海術練習艦として名を馳せている。カナダで建造された「肇敏」(排水量 885 トン) は、77 年に練習艦に指定され、79 年には肇敏艦と改名されている。3 隻とも乗組人員数 200~300 の木造船であるが、顧問団による水夫教育には十分な規模であったと考えられる。¹⁸⁾

顧問団の雇い入れ期間を見ると、コリンズ兄弟等当初来日した団員の約半数が約 6 年間で最も長く、顧問団を率いたアーチボルド・ダグラス中佐は、他の任務への転職によって最も短い。日本滞在中に死亡した顧問団員もいれば、理由はともかく勤務状況不良で解雇された水夫が 2 名いる。ダグラスは 73 年 7 月から 75 年 7 月に帰国するまでの日本滞在中に海軍兵学校の基礎を構築したとして、日本海軍史の中で大きな尊敬を集めるとともに、75 年に制定された勲一等旭日大綬章を受章している。¹⁹⁾ ところで、本来 3 年の契約であった顧問団長の任務を途中で 1 年を残し切り上げるという決断をダグラスがしたことは理解に苦しむが、その背景にはダグラスの昇進問題があったのではないかと推察できる。3 年にも及ぶ海外勤務が中佐の階級からの昇格の障害になっているとダグラスが考え、移動の希望を 75 年 1 月末に出したと考えるのが最も自然な解釈であろう。ダグラスの移動希望は認められ、彼は 75 年 7 月 23 日に離日している。²⁰⁾ 或いは、ダグラスに好意的に解釈すれば、彼は 2 年間の顧問団を率いての兵学寮で

¹⁵⁾ 防衛省防衛研究所 (以後防研と略記)、海軍省—公文備考—M10—24—59、0576 頁及び公文備考—M10—27—62、1006 頁。

¹⁶⁾ 防研、海軍省—公文備考—M10—28—63、1381 頁。

¹⁷⁾ 梅溪昇編『明治期外国人叙勲史料集成』思文閣出版、78-9 頁。

¹⁸⁾ これら艦艇の詳細は、海軍歴史保存会『日本海軍史』第一法規出版、第 7, 9, 10 巻及び片桐大自『聯合艦隊軍艦銘伝』光人社を参照されたい。

¹⁹⁾ 篠原宏『日本海軍お雇い外人』156 頁。

²⁰⁾ 篠原『海軍創設史』279-80 頁

の教育訓練で、団長としての立ち上げは成功裏に終えることができ、以後彼の部下に顧問団指揮を委ねてよいと判断したのかも知れない。ダグラスが離日した翌年の 76 年に築地にあった海軍操練所は海軍兵学校と改称されたが、兵学校自体 88 年には江田島に移転している。このことは、ダグラスが帰国した 75 年には、海軍兵学寮の教育機関としての体裁が一応整ったことを意味していると考えられよう。その後の展開が示すように、ダグラスに従った顧問団員は、砲術、機関術、測量、造船等新政府海軍の必要としたすべての領域において兵学寮の生徒に教育を施すに十分な知識と経験を持っており、さらに契約が 3 年間延長された後も、コリンズ兄弟を含め残された顧問団員で帝国海軍の発展に向けて十分な貢献がなされたことは疑う余地がない。その意味でダグラスの顧問団長としての僅か 2 年間の滞在は、顧問団による海軍兵学寮教育の基礎を形作るに十分な期間であったと言えよう。

ところで、帝国海軍最初の海外展開であり艦船 7 隻が参加した 1874 年の台湾出兵に際しては、ダグラスは明治政府より助言を求められている。²¹⁾ 翌年の江華島事件では、英国アバディーオンで建造された小型軍艦「雲揚」が、漢江河口の江華島及び永宗島砲台と武力衝突に陥るが、上陸して一時砲台を占拠した部隊は、コリンズ兄弟の指導訓練を受けた部隊であったとオマホニは紹介している。²²⁾ コリンズ指導の部隊が砲台占拠部隊であった可能性は十分にあると考えられる。兵学寮では砲術や航海術、機関術等所謂シーマンシップに必要な知識や実地訓練のみならず、海兵としての訓練もなされていたようである。後に海軍陸戦隊と称されるようになるが、71 年からの 5 年間程は、英国海兵隊 (Royal Marines) を模範とした「海兵隊」と呼ばれる戦闘部隊が成立していた模様である。海軍の歩兵及び砲兵で構成する部隊で、このような部隊が江華島事件の際に「雲揚」に乗り組んでいたと考えられる。ダグラス中佐に話を戻すと、露土戦争に際し、彼はロシア側の極東での活動に関する情報収集のために、英国海軍艦船エゲリア (HMS *Egeria*) を指揮しカムチャッカ半島ペトロパヴロフスク駐留のロシア軍の偵察を行っている。そして、既にロシアが当地の守備隊を撤収させていることを英国海軍上層部に報告している。²³⁾ その後ダグラスは、コロンボからボンベイ、アデンに至るインド洋海域の貿易ルートを防御する東インド艦隊司令官、カナダのハリファックスに司令部を置く北米艦隊司令官、イギリス南西部の防備を責務とするポーツマス司令官 (Commander-in-Chief, Portsmouth) を次々と歴任しており、日本での顧問団の任務を終えた後も英国海軍の出世街道をひた走ったことになる。彼の顧問団契約の一年短縮が結果的に吉と出たのかもしれないし、あるいは彼の

²¹⁾ 'Sir Archibald Lucius Douglas', *The Douglas Archives: A collection of historical and genealogical records*, <http://www.douglashistory.co.uk/history/archibaldluciusdouglas.htm> を参照。

²²⁾ O'Mahony, *The History and Folklore of Carrigaline*, p. 211.

²³⁾ Ian R. Stone, 'Spying on the Russians: Archibald Douglas and HMS *Egeria* at Petropavlovsk, 1877-1878', *Polar Record*, vol. 30, issue 172 (Cambridge, 1994), pp. 39-42.

能力からして、日本での在留期間の長短に関係なく、彼の英国海軍での成功は約束されていたのかも知れない。

明治政府側からの招聘要請人数は 11 名であったが、それがなぜ 34 名にまで膨れ上がったかは定かではない。大洋に漕ぎ出したばかりの大日本帝国海軍にとって、11 名の教師ではあまりに貧弱な顧問団との印象は拭えない。海軍力増強に関わる機関術、砲術、測量術、造船等あらゆる方面の技能伝達には 34 名は必要人数であったと思われる。明治政府にとっては出来るだけ早い時期に招聘したい顧問団であったが、英国政府との交渉は遅々として進まなかった。発足したばかりの明治政府に対する信頼性の欠如に加えて、戊辰戦争で突如中断となったトレイシー軍事顧問団に対する日本側の対応が十分でなかったことが挙げられよう。英国海軍当局が、そのような不安定な極東の国に自国海軍の顧問団を送ることを躊躇することは容易に理解できる。結局ロンドンでの交渉には、岩倉使節団の伊藤博文や全権公使としてロンドンに派遣された寺島宗則大弁務使（弁務使とは公使の意）を加えての大掛かりな交渉となった。ちょうど英国に帰国中のハリー・パークスの進言もあり、最終的にグランヴィル外相は日英関係の促進のために顧問団派遣に賛同する。パークスの進言にもあったように、英国が顧問団派遣を断った場合に明治政府が他の欧州列強に派遣依頼をすることは明らかであり、そのことは英国の国益にかなうことではないとの判断も英国側にあったとされる。またパークスは顧問団の選考に当たっては、英国海軍の核心を教授できる優秀な人材の登用が必要なことにも言及している。新政府は 70 年の兵制改革による帝国海軍成立において、海軍兵式は英国式を模範として組織整備することを決めていたが、英国が顧問団派遣に難色を示した場合、このような方向性が頓挫することも考えられたであろう。この交渉が行われた 72 年 11 月は、寺島が同席しパークスも加わった岩倉具視・グランヴィル外相会談が開かれ不平等条約改正問題が話し合われた時でもあった。日本側の条約改正要請を拒む英国政府との間に緊張した会議でのせめぎ合いがあった頃に、この海軍顧問団派遣問題も両国で審議されたことになる。明治政府は不平等条約改正のためには海軍力も含めた富国強兵が必要であると考えようになるが、その一助となる軍事顧問団派遣を条約改正問題で有利な条件が引き出せない中で交渉しなければならなかったことは、歴史上の皮肉な展開と言えなくもない。ところで、当初の招聘要請人数から判断すると、砲術と機関術の教育を日本側は重視していた形跡がある。²⁴⁾ その意味では、本稿の主人公の一人であるコーネリアスにとっては、日本は自分の力を最も発揮できる任地の一つであったし、日本にとっても彼は最も有用な指導者の 1 人であったと言えよう。

²⁴⁾ 篠原『海軍創設史』256-60 頁。

3. ダグラス顧問団第1期契約期間の活動

1873年（明治6年）7月27日、英国海軍の顧問団は香港経由で横浜港に無事到着する。英国出発前の4月には両国間で雇用契約書が交わされている。契約の締結では、日本側が全権公使の寺島宗則、英国側は海軍本部（Admiralty）の実務を担う Naval Secretary であったロバート・ホール（Robert Hall）が立ち会って署名をしている。第2条において上級士官と中級士官には英国客船の1等室、下士官及び水夫には2等室があてがわれることになり、明治政府はその費用に加えて日本に出発するに際して支度金として階級に応じて一定額を支払う約束をしている。第3条には給与の取り決めがあり、顧問団長のダグラスは年間4800ドル（960ポンド）、副顧問団長で砲術科長のチャールズ・ジョーンズ（Charles W. Jones）、航海大尉で測量科長のチャールズ・ベイリー及び機関長のフレデリック・サットン（Fredrick W. Sutton）の3人の上等士官には各人年間3600ドル（720ポンド）ずつが約束された。また、中等士官には基本給と手当を合わせて1750ドル、下等士官には同1090ドル、掌砲、水兵長及び測量手には同920ドル、俊秀水夫及び適応水夫には同690ドルが支払われた。コリンズ兄弟は水夫としての勤務であったから、最低額が支払われていたことになる。日本への船旅期間中の給与は半額と決められている。第4条では日本到着から3年間の契約であること、第5条では住居の提供と着任時に家具購入費用が支給されること、第10条では、行状不善或いは規則違反で免職となった場合、退職後は給俸を支払わないことが取り決められている。また第12条では、全員終始その職務に励み、決して商行為に関与してはならないことが定められている。²⁵⁾ 明治新政府としては、海軍力強化のため財政上支出できる最大限を用意して顧問団を歓迎したと言えよう。

新政府は1871年（明治4年）1月10日の太政官通達で「海軍兵学寮規則」を公布している。²⁶⁾ 翌72年には兵部省を廃して海軍省と陸軍省を設置しているが、ダグラス率いる顧問団の着任を機会に「新兵学寮規則」が制定されて、海軍兵学寮の様相も一新されることとなる。規則を含む兵学寮の改革こそダグラスが来日後最初に手をつけた仕事であった。雇入れ定約第6条ではダグラスに対して「海軍省官員ト商議ノ上教授ノ時限及其他海軍學校ニ緊要ナル規則ヲ編ス可シ但シ新ノ規則ハ海軍卿ノ應許ニ因テ設立スヘシ」と求めていることから、ダグラスの行動はこの雇用契約内容に沿ったものと考えられる。²⁷⁾ 当然改革の基盤にあったのは英国海軍の諸

²⁵⁾ 海軍兵学校編『海軍兵学校沿革—明治二年～大正八年—』原書房、132-9頁；O'Mahony, *The History and Folklore of Carrigaline*, pp. 207-8.

²⁶⁾ この「海軍兵学寮規則」の内容は、岡山大学池田家文庫マイクロフィルム目録データベースシステムのもの参照。

²⁷⁾ 海軍兵学校編『海軍兵学校沿革』138頁。

規定や慣習であり、帝国海軍の英国化が進められる発端の 1 つとなった。²⁸⁾ 入寮した生徒は、「終身海軍ニ従事スヘキ誓書ヲ為スヘシ」と規定され、その代わり、「生徒ハ入寮ノ日ヨリ衣服ハ勿論其他ノ諸具ニ至ル迄悉ク官費ヲ以テ給與スヘシ」とされた。²⁹⁾ 初級士官養成教育を開始した帝国海軍であったが、招聘されたダグラスは英国海軍を模範とした紳士教育を前提として、英語や数学といった教科を重視し、英語教育に関しては専任の語学教師を雇い入れるよう要請する力の入れようであった。海軍の語学教師としては、英国顧問団が来日する 2 ヶ月前にお雇い外国人として来日し 74 年から 82 年まで海軍兵学校で英語を教えていたバジル・チェンバレンが有名であるが、顧問団の一員としてジョン・クリスチソン (John Christison) も 73 年 7 月から語学教師の任に当たり、下士官級の給与を得ていた。86 年から東京帝国大学の外国人教師となり、ラフカディオ・ハーンとも親交があってハーンを松江中学の教師に斡旋し、後にアーネスト・サトウやウィリアム・ジョージ・アストン等とともに有名な日本研究家となる学者肌のチェンバレンと比べると、後述するように埼玉県蕨宿で問題を引き起こすクリスチソンは、普通の若い語学教師であったとの印象が残る。76 年 (明治 9 年) 7 月 28 日から 3 か年の新しい雇用契約では、クリスチソンの官名は一等小監補で、月給は日本金貨 100 円とされている。³⁰⁾

ダグラスは机上の理論よりは実地訓練を重視し、実戦教育に重点を置いた海軍教育システム整備に尽力している。「其ノ授クル所ハ主トシテ実地修練ニ止マル殆ンド理論ニ亘ル事ナシ」とある評者のダグラス評の通りである。ダグラスはまた、着任すると間もなく砲術稽古舎の設立を申し出ており、実地訓練の環境整備に腐心している。³¹⁾ 機関長フレデリック・サットンの助言もあり実現した機関術実地訓練のための分校の横須賀設置も、このような実地教育重視の流れに沿ったものであろう。サットンは機関科生徒のために新たに教則を起草し、78 年 5 月 1 日に海軍大輔の川村純義に送付している。サットン提案に対して兵学校長に就任したばかりの仁礼景範は 5 月 16 日付で川村に書簡を送り、教務課においてサットン案を検討した結果、「実地経験之上不適當之稜ハ尚修正ヲ加ヘ候様可致候就テハ愈御決定之上ハ現今機関科一号生徒ヲ除キ其余之生徒ハ右教則ニ遵ヒ教授為致候」と報告している。³²⁾ これは機関科の生徒を横須賀造船所で実地修練させるために提案されたもので、74 年 6 月 3 日に兵学校横須賀分校として本格的に機関科の養成が始まる。教師は副機関士のトーマス・ギッシング (Thomas S. Gissing) が行ったが、その後 78 年 6 月に海軍兵学校附属機関学校となり、これが帝国海軍の機関学校

²⁸⁾ 「新兵学寮規則」は英国海軍の The Queen's regulations and the Admiralty instructions for the government of Her Majesty's Naval Service, 1862 に依拠するところが見られる。篠原『海軍創設史』266-7 頁。

²⁹⁾ 防研、海軍一般史料、明治 9 年海軍省布達全書、JACAR (アジア歴史資料センター)、レファレンスコード C12070001100。

³⁰⁾ 防研、海軍省一公文備考-M10-24-59、0808 頁。

³¹⁾ 防研、海軍省一公文類纂-M6-22-144、1671 頁。

³²⁾ 防研、海軍省一公文類纂-M11-26-330、0369-0373 頁。

の始まりである。そして 81 年には海軍機関学校と改称されている。³³⁾ サットンの助言の下機関学校を具体的に推進していったのは、横須賀造船所長であり海軍兵学校長も歴任した中牟田倉之助である。78 年に中牟田は、5 月 27 日付で川村純義に提出した「横須賀兵学分校へ機関科生徒轉移御下問上答」において、横須賀造船所隣接の兵学校分校に機関科生徒を移し、機関学校と改称することについて異論ない旨解答している。³⁴⁾ 元々幕府によって開設された横須賀造船所の前身は、フランス人技師レオニス・ヴェルニーによって建設指導された横須賀製鉄所であり、この頃フランス人造船技師も指導に当たっていたが、機械方長であったフランソワ及び船具職のモノー両名は、77 年 5 月をもって解雇され造船所を離れている。³⁵⁾ 兵学寮のみならず機関学校においても英国人顧問の意見が重用される中で、英国海軍からの雇入れ軍人第 1 号であったホースの影響力やダグラス指揮の 34 名の英国顧問団の存在は、帝国海軍の英国化が進む大きな契機となった。

ダグラスを始めとする上中級士官のみならず、下士官やコリンズ兄弟のような水夫に至るまで、彼等は海軍兵学寮の教育の他にも日本海軍や日本社会との間に様々なつながりを持っていた。語学教師ジョン・クリスチソンの事例などは顧問団の一員としては褒められた行為ではないが、彼らがおとなしく海軍兵学寮に閉じこもっていたのではなかったことを示している。74 年（明治 7 年）12 月にクリスチソンは遊歩区域外の埼玉県蕨宿で遊猟・止宿する事件を起こしている。外国人免状を所持していなかったため、県に通報され埼玉県官員に海軍省まで護送されている。「外国人護送之義二付御届」と称して埼玉県権令白根多助より明治 7 年 12 月 14 日付で外務卿寺島宗則宛に届が出されている。クリスチソンを引き取った海軍兵学寮からも、12 月 15 日付で「免許不所持海軍省雇教師引取に付回答」との文書が出され、外務省にはクリスチソンの謝罪状が残されている。クリスチソンは、全くの不案内から起きたことと弁明しており、今回は「爾後の為篤ト示諭アルベキ」という条件で不問となる。しかし、「不案内ヲ名トシ、勝手二遠地へ旅行候様之義無之様、御省ニオイテモ御注意有之度、此段再応申入候也」と外務

³³⁾ 篠原『海軍創設史』272, 274-6, 282 頁。

³⁴⁾ 防研、海軍省—公文類纂—M11—26—330, 0369-0373, 0395 頁。

³⁵⁾ 防研、海軍省—公文備考—M10—24—59, 0799 頁。もちろんこのような単発の出来事によって、帝国海軍におけるフランスの影響力が大きく減ることになったと結論づけることはできない。海軍はその後も川村純義の海軍拡張ラインに沿って、主に英国から艦船を買い入れるが、フランスには「畝傍」を発注し、さらにフランスで「畝傍」建造にも関与した造船家のエミール・ベルタンを 86 年に招聘している。彼の年俸は他のお雇い外国人の 20 倍であったと言われている。川村を始め海軍には最新鋭国産艦建造の夢があり、ベルタンの力を是が非でも借りたかった故の厚遇招聘となったと思われる。篠原『海軍創設史』304~12 頁。1906 年 5 月にダグラスは勲一等旭日章を受けているが、それより以前の 1894 年 12 月にベルタンは勲一等瑞宝章を受章している。ベルタンの帝国海軍への貢献度が高く評価されていた証拠である。幕藩体制末期からフランスは幕府への造船技術の伝搬に大きな役割を果たしたが、明治期になっても帝国海軍のお雇い外国人の中でフランス人がイギリス人に次いで多いのは、横須賀造船所での指導が続いたからに他ならない。篠原宏『日本海軍お雇い外人』155-6 頁。

省から海軍省に強く申し入れがなされている。³⁶⁾ このような事例の他に行状不良で解雇された水夫が存在したことは、顧問団の陣容も完璧ではなかったことを示唆しているが、顧問団員に対する実際の訓練や教育における評価は非常に高かったと理解してよい。

ところで、兵学寮の他にも顧問団は帝国海軍の各方面と接触を持っている。顧問団幹部は、兵学寮校長の中牟田倉之助を始め海軍省首脳との会合や懇親の場を通じ、友好のみならず情報提供及び情報交換を何度も行ったようである。また明治天皇も観閲した 75 年 1 月 9 日の海軍始式には、英国顧問団の上級士官達も士官席から観覧し、水夫達も観閲席近くの入り口に起立したまま陣取った。コリンズ兄弟がこの輪の中にいたかどうかは定かではないが、その可能性は大きい。海軍始式は、新年における言わば小規模な観艦式 (Naval Review) のようなものであったと思われるが、異国での海軍儀礼がコリンズ兄弟等 20 歳代前半の水兵にどのような印象を与えたか興味がそそられる。海軍始式は毎年行われるわけであるが、式典におけるお雇い外国人の役割や取るべき行動は、海軍省布達にはっきりと規定されている。天皇が臨幸されるわけであるから細かな通達がなされて当然であるが、お雇い外国人に対して海軍始式において大きな役割が与えられていたことが読み取れる。布達には「例年之通」との記載があるから、海軍始式は毎年ほぼ同じ形式で挙行されたのであろう。76 年 (明治 9 年) の布達を見ると、午前 8 時に皇居を出られた天皇は現在の銀座みゆき通りを通過して兵学寮に向かう。そして、外郭門外に隊付佐官が、兵学寮門外では海軍省の奏任官以上の者 (即ち高等官) 及びお雇い外国人 (上級士官) が奉迎することになっていた。また、兵学寮門内の左右には、判任官 (高等官より下の官吏) と兵学寮生、そしてお雇い外国人の中士以下の者 (中級士官以下) も整列礼式することが求められた。艦船において祝砲が各 21 発放たれた後、天皇休憩時に勅任官とともにお雇い外国人も天皇謁見の榮譽にあずかっている。その後午前 11 時には、東岸錬砲場においてアームストロング砲が発せられ、また碇泊中の乾行艦において登桁奉拝の式が行われた。³⁷⁾

4. 顧問団の契約更新後の活躍

1876 年 7 月に 3 年の契約期間が過ぎると、トーマス・ギッシングとウィリアム・ハーディング (William J. Harding) の両副機関士、さらには掌砲長 (chief gunner) であったジョセフ・ヒギンズ (Joseph Higgins) といった中級士官で兵学寮での教育の中枢を担う人材を含め 14 名が英国に帰国する。日本に残りさらに 3 年の契約を結んだ 18 名の中には、顧問団長を引

³⁶⁾ 芳賀明子「明治前期埼玉の外国人に関する史料について—埼玉県外事関係行政文書を中心に—」『文書館紀要』埼玉県立文書館、10 号 (1997)、62-3 頁。

³⁷⁾ 防研、海軍一般史料、明治 9 年海軍省布達全書、JACAR レファレンスコード C12070000400。

き継ぎ准艦長兼指令官の官名を付与されたチャールズ・ジョーンズ中佐、フレデリック・サットンやチャールズ・ベイリーといった上級士官の他に、コリンズ兄弟が含まれていた。77年2月27日に海軍中秘史(秘書科の中佐相当)小森沢長政が中牟田倉之助に宛てた文面によると、サットン以下17名の定訳書訳文を総計100部活版印刷にかける申し出がなされている。その内訳は、サットンとベイリー関連で14部、一等掌砲長のジョセフ・オースティン(Joseph W. Austin)とチーフ掌砲長のエマヌエル・ヨウ(Emmanuel S. Yeo)関連で14部、さらにコリンズ兄弟を含む中下士卒の13名で72部である。この定訳書は契約の3年延長に伴う書類と推察される。³⁸⁾翌77年にジョーンズ中佐は病死するが、顧問団員が徐々に減少する中、コリンズ兄弟にかかる負担と期待はさらに大きくなっていったと考えられる。最後まで兵学校の教育に尽くした者としては、コリンズ兄弟の他には砲術担当で一等測量手のフレデリック・ハモンド(Fredrick W. Hammond)を挙げることができる。ハモンドは、76年からの再雇用契約では兵学校での官名が掌砲属上頭で、月給は100円を得ていたため、官名が俊秀水夫のまま月給70円のコリンズ兄弟に対しては上官の立場にあった。ちなみにチャールズ・ジョーンズは月給500円を受け、上頭機関士のフレデリック・サットン及び測量士のチャールズ・ベイリーは、それぞれ400円を受領している。³⁹⁾ハモンドとコリンズ兄弟は、日本文化や兵学校の生活にも十分に適応し兵学校教育に大きく貢献したために、後述するように一緒に叙勲を受けている。

ところで、オマホニによると、日本到着時には俊秀水夫の階級で登録されていたコリンズ兄弟は、76年には下士官(petty officer)の階級に昇進していたようである。これは、日本側文献である海軍省公文備考にある77年の段階でもコリンズ兄弟は俊秀水夫であったとの記載と異なる。オマホニがこの情報をどこから得たのかは不明であるが、雇用契約第1期の兄弟の活躍を見れば76年段階での昇進も十分に考えられる。オマホニは昇進の結果、兄弟の給与と諸手当の合計も週5ポンドと非常に魅力的な金額となっていたと書いている。当時アイルランドでの交易商の週給が1ポンドと言われていたから、コリンズ兄弟が受けとった給与は彼らにとってかなりの高額であったことになる。週5ポンドというと月約20ポンドであり、ドルで換算すると約100ドルとなる。明治13年ごろの為替レートは、日本銀行創設が明治15年であるので正式なものはないが、当時ニューヨーク向けで最高値(平均値はこの年のものは残っていない)は、100円=95.25ドルぐらいであったと言われており、約1円=1ドルの換算になる。5ポンドには、オマホニが言うように給与の他に諸手当も含まれていたから、海

³⁸⁾ 防研、海軍省—公文類纂—M10—27—247、0555-0556頁。小森沢長政は、初期の海軍法制度の確立に尽力したことで知られる。

³⁹⁾ 防研、海軍省—公文備考—M10—24—59、0804-0816頁

軍省史料のコリンズ兄弟の月給 70 円は、諸手当を含んで約 100 円と考えてよいであろう。78 年には様々な階級の 497 名が兵学校のコースを終了しているが、昇格試験も、海軍と海兵の両方において、最下級の新米水夫から最上級水夫の階級に至るまで実施されていた。最上級水夫は下士官や砲術教官への昇格を目指していた。これらの人材こそ発足した帝国海軍の中核となって活躍する者達である。コリンズ兄弟等残留顧問団員によってなされた指導の成果は、昇格試験によって帝国海軍において厳格に審査されていたことになる。3 年延長された契約期間を終えた英国顧問団員は結局 13 名であり、79 年 5 月 2 日に 3 年の再雇用期間を終えて兵学校を離れている。その中にはコリンズ兄弟も含まれていた。⁴⁰⁾ 契約延長をした顧問団員の再契約も 79 年には満期を迎えたわけであるが、その 1 年程前から兵学校の教務課サイドでは、顧問団員が帰国してしまった後の兵学校教育をどのように行うかについて議論がなされていた。⁴¹⁾ さらに契約終了直前の 79 年 4 月には、顧問団員に記念品の贈与が検討されている。ジョセフ・オースティン、コリンズ兄弟、ウィリアム・ウッドワード、マーク・アップスには 30 円から 100 円の間で花瓶の贈呈が、そしてそれとは別に、コリンズに対してはさらに漆器の贈与が計画された。⁴²⁾ 僅かな贈与品であるが、帝国海軍がいかに顧問団の貢献を評価していたかを示すものである。

コリンズ兄弟は他の英国人教官達と船で 2 ヶ月かけて英国に戻り、直後にほぼ 10 年ぶりにアイルランドに帰国している。兄弟の英国海軍との 10 年契約は 79 年 4 月に失効したため彼らは除隊となっている。しかし、数週間のアイルランドでの休暇後、コリンズ兄弟は再び日本に向けて出国したのである。この間コリンズ兄弟と日本側でどのようなやり取りがあったか詳細は不明である。第 2 期雇用契約が終了して離日する前に、兄弟と兵学校との間で何らかの非公式な約束が交わされたのかも知れない。いずれにせよ、英国海軍での契約・昇進はもはや望めず、今回は独自の立場で帝国海軍と契約を結んだと思われる。そのため、前回の滞日のようなお雇い外国人としてではなく、自分たちの 6 年間の実績が評価されての再来日であったと考えるのが自然であろう。83 年（明治 16 年）1 月 21 日に海軍卿から外務卿及び会計局長に宛てられた書簡を見れば、コーネリアス・コリンズの契約は 82 年 11 月 21 日に切れており、さらに 3 年契約を更新することが決定されている。⁴³⁾ 一般に契約は 3 年間であったことを考慮すると、日本に再来日した時点でのコリンズ兄弟の契約は 79 年 11 月 22 日に始まったと考えるのが妥当であろう。英国海軍の一員として滞在した前回の契約が 79 年 5 月 2 日に終了していること

⁴⁰⁾ 篠原『海軍創設史』281-2 頁; O'Mahony, *The History and Folklore of Carrigaline*, pp. 212-3

⁴¹⁾ 防研、海軍省—公文類纂—M11—26—330、0383-0384 頁。

⁴²⁾ 防研、海軍省—公文原書—M12—32—275、0146-0147、0323-0325 頁。

⁴³⁾ 防研、海軍省—公文原書—M15—38—506、0936 頁。「客年十一月二十一日雇満期ノ処引続キ向三ヵ年間従前之給料ヲ以雇継候條此旨及御通達致也 明治十六年一月二十一日」

から、11月22日までの約半年の間に英国経由でのアイルランド帰国、再来日、再雇用契約と速やかにことが進んでいった点に着目すると、コリンズ兄弟との再雇用の話は彼等の離日前にある程度まとまっていたと推察できる。各種史料からは、コリンズ兄弟とウィリアム・ウッドワードが再雇用契約に至ったことが読み取れる。兄弟とウッドワードは、英国海軍顧問団の一員として教授・訓練に当たった頃から俊秀水夫として同じような待遇にあった。再来日後の契約においても、横須賀での教育訓練や叙勲に際し一緒に名前が出てくることから、3人は殆ど同じような境遇にあったと思われる。彼等の他に英国顧問団の契約終了後も帝国海軍との再雇用契約を結んだのは、階級としては3人の上官の立場にあり後述の叙勲にも顔を出すフレデリック・ハモンドであった。

こうしてコリンズ兄弟は再度海軍兵学校に迎えられるが、80年及び81年の試験の記録によれば、兄弟は79年（明治12年）の離日前と同じ科目を教授していたようである。彼等の寄留地としては、コーネリアスが海軍造船所官宅、ジョンが横須賀11番官舎との記録もある。この記録は80年7月末に出されたコリンズ兄弟の「旅行免状渡方外務省へ掛合」と称するものであるが、コーネリアス（海軍省史料では普通シーコリンズと表記）は8月1日より1か月間病気養生のため箱根及び富士山周辺の保養地への旅行を横須賀からの往返陸行で希望し、外務省に対して内地旅行免状の発行を願い出ている。海軍卿から外務卿に出された申請状に添付された富士山艦乗組海軍少軍医福田純一作成の医証によると、コーネリアスの症状に関し「平素皮膚発疹症ニ罹リ易シ依之自今三週日間温泉入浴適然ニ候条此旨診断候也」とある。⁴⁴⁾ ジョン・コリンズも旅行期限が7月30日から9月1日の期間ではあるが、ほぼ同じ時期に熱海、箱根、富士山地方へ東海道往復ということで内地旅行免状を出している。旅行趣意は健康保養であるが、病気養生のコーネリアスを連れ立っての旅行であったことは間違いない。彼らに発行された旅行免状は、クリスチソンが不保持のため埼玉官員に取り押さえられた外国人内地旅行免状であるが、免状が下付された後「帰着ノ上ハ返納可致事」とある。⁴⁵⁾ 当時内地旅行の出発届はかなり大掛かりな手続きを踏んでおり、コーネリアスについては、富士山艦長から80年8月2日付で東海鎮守府司令長官海軍少将林清康宛に、そして5日付で林から海軍卿榎本武揚に届けが出されている。ジョンの出発届も8月2日付で浅間艦長井上良馨より東海鎮守府司令長官宛に、その後5日付で林より海軍卿榎本に届けがある。⁴⁶⁾ 公文原書には、ジョン・コリンズの外国人内地旅行免状返納が、8月31日付で林鎮守府司令長官から海軍卿代理の伊東祐磨海軍少将に宛てて報告されている。⁴⁷⁾

⁴⁴⁾ 防研、海軍省—公文原書—M13-49-395、1268-1276頁。

⁴⁵⁾ 防研、海軍省—公文原書—M13-48-394、0950-0956頁。

⁴⁶⁾ 防研、海軍省—公文原書—M13-51-397、1044-1046頁。

⁴⁷⁾ 防研、海軍省—公文原書—M13-55-401、0203頁。

上述のように、コリンズ兄弟は 82 年 11 月 22 日から再来日後最初の 3 年間の契約更新期間に入る。再雇用契約は中牟田倉之助東海鎮守府長官とコーネリアス・コリンズ、ジョン・コリンズ、ウィリアム・ウッドワードの間でそれぞれ締結されている。まず第 1 条で、「雇継期限ハ明治十五年十一月二十二日ヨリ起算シ満三ヶ年トシ水兵ヲ教授スル事ヲ補助ス可シ」と定められている。第 2 条には「給料ハ海上陸地ノ勤務ヲ論セス一ヶ月日本貿易銀百五十円ト定メ毎月末ニ相渡スヘシ」とある。月給 150 円は、ダグラス顧問団として最初に来日した時の彼等の給与が月約 60 円であったから、顧問団員としての期間中も昇給はあったが、かなりの昇給額と理解してよい。同条には、「但本文給料相渡ス外ハ従前所謂加俸等一切支給セザルベシ」とのやや厳しい一文も付加されている。⁴⁸⁾しかし、それから 1 ヶ月も経たない 12 月 20 日の文書によると、「鎮守府申出ウードワルド他二名之賞与金下賜之義ハ会計局意見御諮問可相成哉」とあり、ウッドワードやコリンズ兄弟に対する賞与の下付を検討するように要請が東海鎮守府から会計局に対してなされている。鎮守府側で彼らの教授に対する評価が極めて高かったことを示唆していると言えよう。⁴⁹⁾第 3 条では、「解雇帰国ノ節ハ英国郵船第二等船賃及ヒ旅費五十弗ヲ支給スベシ」とあり、第 6 条で契約期間中の商活動の禁止、日本政府の法律順守を約束させている。第 7 条は契約期間中の居家並びに家具は貸渡すとしながらも、食料と身の上に関する諸経費や住居の様態替えは自費負担とすべしと定めている。第 9 条では、契約違反や品行不正ある時は直ちに職務を免じて契約を解除し、その日より給料の支給を停止するとある。帰国時に叙勲を受けたコリンズ兄弟等にとっては結果的に無用な条項であった。第 10 条には「雇期間中病に罹ル時ハ海軍省ノ医官ヲ以テ治療セシムベシ然レドモ自己ノ望ニテ他ノ医師ノ治療ヲ受ル時ハ其費用自辨スベシ」とあるが、先述のようにコーネリアスは療養に際し富士山艦乗組海軍少軍医作成の医証を提出しているところを見ると、自艦の軍医を信頼して皮膚病の治療に当たり、余計な費用を節約していたことがわかる。彼等の契約は更に 3 年更新され、88 年 11 月まで帝国海軍での水兵訓練に従事することになる。

コリンズ兄弟やウッドワードの貢献に対する感謝の念は、彼らが教官として乗り込んだ浅間艦や富士山艦の乗組員の間からも持ち上がった。浅間艦副長山本権兵衛は、ジョン・コリンズの平素からの砲術授業における枯骨勉勵に対して慰労の意味を込めて官費での饗応を催したい旨 83 年 9 月 19 日付で中牟田鎮守府長官に願い出ている。⁵⁰⁾富士山艦長児玉利国海軍中佐もコーネリアス・コリンズとウッドワードに対し、「御雇教師二名官費饗応之義上申」との上申書を鎮守府長官に 11 月 20 日付で提出し、「右者当艦御乗付相成候従来一般教授上ハ素ヨリ士官

⁴⁸⁾ 東海鎮守府長官とコリンズ兄弟及びウッドワードとの再契約文書は、防研、海軍省一公文原書-M15-38-506、0936-0960 頁を参照。

⁴⁹⁾ 防研、海軍省一公文原書-M15-38-506、0963 頁。

⁵⁰⁾ 防研、海軍省一普号通覧-M16-31-31、0667-0668 頁。

ヨリ百事質問致テモ懇切ニ教授候ニ付時々士官中私費饗応仕候得共此際官費ヲ以テ饗応致度候条特別之御吟味ヲ以テ右費額御下付相成候様致度此段上申仕候也」と申請している。ダグラス顧問団幹部は、中牟田を始め海軍省首脳との会合や懇親の場を通じ、友好の増進に努めたのみならず情報提供を何度も行っていたと先述したが、児玉によるこの上申書の記述を見ると、コーネリアスやウッドワードも、水兵の階級でありながら帝国海軍士官からの様々な質問に丁寧に対応しており、それに応えて士官達が私費で2人をもてなしていた様子が浮かび上がってくる。今回はそのような饗応を官費で公式に行おうとする提案であるが、記録では児玉は士官 15 名程の参加を予想していたようである。⁵¹⁾

このように2度目の来日後のコリンズ兄弟の滞日は、コーネリアスの病氣治癒のための1ヶ月の温泉療養を除けば、帝国海軍側の士官や水兵との関係も良好で特に問題なく過ぎ去った感はある。この病状も軽微なもので温泉療養は兄弟にとっては程よい休養の期間となったと思われる。記録に残るものから判断すると、事故として挙げられるのはジョン・コリンズが被った盗難被害くらいであろう。83年11月12日付で東京軽罪裁判所検事野崎啓造から海軍書記官に対して、兵庫県神戸区出身の青野熊吉に関して次のような書簡が送られているが、その内容は「右之者犯罪ノ廉有之逮捕尋問候処明治十六年八月二十三日箱根芦ノ湯村温泉宿山本ユウ方ニ於テ其省御雇英国人浅間艦乗組（ジョンコーリンズ）所有金六拾貳圓九拾銭ヲ窃取シタル旨供出候ニ付夫々取調ヲ爲スニ其際被害者（ジョンコーリンズ）ヨリ出訴モ有之事実相違ナキ者ト思料シ東京軽罪裁判所へ公判ヲ求メ候条其旨被害者（ジョンコーリンズ）へ御告知有之度此段及御依頼候也」というものである。盗まれた62円90銭はジョンの月給の半分近くになるかなりの大金である。せっかくの箱根芦之湯での休養中にジョンが遭遇したとんでもない事件であるが、盗まれた金は犯人がすべて使ってしまい、しかも犯人は無資力の者で弁済は難しいとのことであった。⁵²⁾

ところで、85年頃にはコリンズ兄弟は、東海鎮守府（84年以降は横須賀鎮守府と改名）統括下の横須賀海軍基地海軍訓練部に配属になっている。⁵³⁾ この頃横須賀の同海軍訓練部にはコリンズ兄弟とウッドワードのみが登録されていた。同訓練部所属の艦船は9隻あり、ジョン・コリンズは横須賀を基地とする練習艦「浅間艦」で訓練に当たったが、この頃艦長井上良馨を助け副長として活躍していたのが、後に海軍大臣、内閣総理大臣となる山本権兵衛である。⁵⁴⁾ 井上と同様海軍薩摩閥に属する山本は、従来の操帆技術重視の方向を転換させ、艦砲射撃教練に

⁵¹⁾ 防研、海軍省一普号通覧—M16—40—40、1255-1256頁。

⁵²⁾ 防研、海軍省一普号通覧—M16—38—38、1076-1079頁。

⁵³⁾ 秦郁彦『日本陸海軍総合事典』第2版、東京大学出版会、2005年。

⁵⁴⁾ O'Mahony, *The History and Folklore of Carrigaline*, p. 216. オマホニは「浅間艦」の指揮を執っていたのは山本権兵衛であるとしているが、彼は同艦の副長として活躍していた。

力点を置いた訓練に移行しようとしていたことから、砲術指導に長けたジョン・コリンズの存在は大いに重宝したに違いない。コーネリアス・コリンズとウッドワードが乗組んだのは浦賀を母港とする「富士山艦」であった。帝国海軍のお雇い外国人は、74年の96人、79年の51人をピークに急減しているが、その理由としては、海軍近代化に役立つ技術や教育等を海軍はこの頃殆ど吸収し、近代化を進める人材を日本人で充足できる体制が整ってきたことが挙げられよう。さらに、明治初期には外国に漏れて困るような秘密もなかったが、87年(明治20年)頃になると、海軍の持つ秘密をお雇い外人を通じて外国に漏洩させたくないとの配慮も働いた可能性がある。コリンズ兄弟の再来日の時期は、お雇い外国人の数がピークを超えて減少し始める時期、そして海軍の近代化が外国人顧問を以前ほどには必要としない時期までの言わばお雇い外国人活躍の最終章の時期に当たると考えられよう。但し、コリンズ兄弟の離日直前の87年は、帝国海軍の戦術面で多大な貢献をしたジョン・イングルス(John Ingles)がお雇い英国軍人として来日し、対清戦争準備に際し各種提案を始めた年である。上記エミール・ベルタン同様高給で招聘されたイングルスのような人材の雇い入れが示すのは、招聘人数は激減したものの、まだこの時期は帝国海軍が特定の目的のために海外の有能な人材を求めていたという事実である。⁵⁵⁾

最終的な帰国にあたりコリンズ兄弟は叙勲を受けているが、まず帰国1年前の87年(明治20年)に勲7等が贈られたことに始まる。この年フレデリック・ハモンド(英国海軍上等掌砲長属)には勲6等単光旭日章が、ウィリアム・ウッドワード(浦賀屯営教師)、ジョン・コリンズ(浅間艦教師)、コーネリアス・コリンズ(富士山艦教師)にはそれぞれ勲7等青色桐葉章が贈与されている。叙勲の主旨に関しては、「海軍省ニ雇入以来其職務ニ勤勉シ成績少ナカラサルヲ以テ海軍大臣ノ照会ニ依リ外務大臣叙勲ヲ上奏ス」とある。即ち、彼等の叙勲には陸軍大臣で86年7月から1年程海軍大臣も兼務していた大山巖が関与していたことになる。そしてコリンズ兄弟が最終的に日本を離れる88年夏には、彼等の勲位進級の議論が進んでいる。「本年八月致解雇候ニ付叙勲七等後日尚浅キト雖モ多年ノ切勞ヲ表彰セラレ今般解雇ノ機ヲ以テ勲位進級ノ儀海軍大臣ノ照会ニ依リ外務大臣之ヲ上奏ス依テ勲位ヲ擬議スル左ノ如シ」として、ウッドワード、コリンズ兄弟をそれぞれ進叙勲6等に叙している。これは先にフレデリック・ハモンドが受勲した勲6等単光旭日章と同じであり、オマホニが著書に掲載した叙勲の英文では、the 6th Class of the Imperial Japanese Order of the rising Sunとなっている。⁵⁶⁾ この勲位進級は、賞勲局文書によると海軍大臣西郷従道よりの申し立てによるものであるが、英国海軍の一等水夫の階級でしかなかった者が、叙勲のみならず僅か1年の間に勲位進級を果たした

⁵⁵⁾ 篠原宏『日本海軍お雇い外人』153-4, 193-9頁。

⁵⁶⁾ O'Mahony, *The History and Folklore of Carrigaline*, p. 221.

事実も、彼らに対する帝国海軍の評価が極めて高かったことを示唆するものである。⁵⁷⁾

5. アイルランド帰国後のコリンズ兄弟と 1902 年の帝国海軍遣英艦隊

1888 年が暮れる前に、コリンズ兄弟は親族の住むアメリカのボストン経由で故郷カリガラインに帰郷している。彼等はカリガライン近くにベルヴュー・ハウスを購入し、日本から持ってきた様々な調度品や記念品で部屋を飾ったとされている。兄弟は地元住人の尊敬を集め、何人かの使用人を雇って家屋と農場で働く毎日であった。農業に熱心に従事したのはコーネリアスであり、彼は特に馬の飼育には格別の興味を抱いていた。1894 年、甲午農民戦争を切っ掛けに朝鮮出兵に至った日清両国の戦いに際し、地元紙 *Cork Examiner* はコリンズ兄弟にインタビューを行っている。日本を取り巻く十分な情報を持たず発言する他のコメンテーターと違い、コリンズ兄弟の大日本帝国海軍での貢献を詳しく紹介した同紙は、兄弟のコメントの信頼性を強調して兄弟の意見を掲載している。1871 年編成の清国北洋水師（水師は艦隊のこと）と南洋水師に分断されていた清国海軍には統一的指揮系統がなく、東洋一の装甲艦「定遠」と「鎮遠」を擁しながら帝国海軍連合艦隊との黄海海戦及び威海衛海戦で敗れている。コリンズ兄弟のコメントは、これら海戦での日本の勝利を当然視する内容であった。兄弟は清国海軍のこのような分断状況を指摘し、それに対して帝国海軍は指揮系統が明確である点を強調している。清国海軍は数的には勝っていても、日本と比べ近代的兵器や組織の面で劣っていたことに兄弟は言及しているが、その他にも鉄道を始め国内輸送についての日本の優位性にも触れている。さらに、水雷艇小艦隊が整備されていることや、短期間で兵員輸送船や巡洋艦に建造し直せる商船隊の存在が、日本を戦略的に有利な立場に置いていると兄弟は同紙の取材で指摘している。さらにジョン・コリンズは、清国が艦艇の指揮を外国人に任せていたのに対し、日本の艦隊は日本人乗組員によって作戦展開されていること、日本陸軍には山縣有朋、海軍には先述の伊東祐磨の弟で後に初代連合艦隊司令長官となる伊東祐亨のような優秀な軍人が作戦司令を行っているという優位性をも指摘している。⁵⁸⁾ 伊東は清国北洋水師との黄海海戦を制し日清戦争での日本の勝利に大きく貢献しているが、85 年から横須賀造船所長や横須賀鎮守府次長に就いていたこともあり、コリンズ兄弟とは親密な関係にあったと推察される。そしてジョン・コリンズを最も喜ばせたのは、海戦時に清国の砲手が殆ど標的を外したのに対して、日本の砲手が正確に敵艦に命中させた知らせを受けた時であり、それは日本においての彼の砲術指導が海戦勝利の

⁵⁷⁾ 梅溪昇編『明治期外国人叙勲史料集成』78-9, 212-4 頁。

⁵⁸⁾ O'Mahony, *The History and Folklore of Carrigaline*, pp. 222-5. 北洋水師には、例えば「定遠」にドイツ砲兵少佐フォン・ハネッケンや英国海軍下士ニコルスが、「鎮遠」にはドイツ人砲術長ヘックマン等が顧問団として乗組んでいた。篠原『海軍創設史』381 頁。

一端を担ったと感じた瞬間でもあった。⁵⁹⁾

ところで1902年8月20日、日露開戦の一年半前、英国ポーツマス港外のスピットヘッドで挙行されたエドワード7世戴冠記念観艦式に派遣されていた装甲巡洋艦「浅間」と防護巡洋艦「高砂」は、その帰路まずアイルランドのコーク・ハーバーに寄港し、当地に碇泊中の英国海軍艦船の海軍関係者、さらには地元コークの名士や住民等とも親しく交流を持っている。⁶⁰⁾ 遠く日本からコーク・ハーバーに寄港した2隻の帝国海軍の巡洋艦を見て、コリンズ兄弟の感慨はいかほどであったか容易に想像がつく。自分達が教えた帝国海軍の士官や水兵達が遠くヨーロッパまで遠征し、今自分達の故郷の近くで英国海軍入隊当初の訓練場でもあったコーク・ハーバーに2隻の巨艦を碇泊させている。況してや巡洋艦「浅間」は、別艦船とは言え、同じ名前を冠した練習艦「浅間」で滞日中に帝国海軍の生徒を指導した過去を思えば、兄弟に特別な懐かしさが込み上げてきてもおかしくない。「遣英艦隊報告軍艦浅間報告」では、英国ポーツマス港外のスピットヘッドで観艦式に参加した時の詳細な記述と比べるとコーク・ハーバー寄港については極めて簡潔な描写ではあるが、コーク地域での地元関係者や地元民による歓待の様子が手に取るように伝わってくる。この遣英艦隊を率いたのは、英国王立海軍大学(Royal Naval College)を卒業した常備艦隊司令官伊集院五郎であるが、彼は下瀬火薬の威力を活かすと言われ日露戦争で広く使用された伊集院信管の開発でも知られる。⁶¹⁾ 伊集院は日露戦争後東郷平八郎を継いで1908年に短期間ながら連合艦隊司令長官に就任している。「高砂」の艦長吉松茂太郎海軍大佐も伊集院の後の連合艦隊司令長官となるから、一時コーク・ハーバーに帝国海軍の将来を担う指揮官が集結したことになる。

コリンズ兄弟が目撃したであろう帝国海軍艦船の地元歓待の様子は、「浅間」の報告書によると次のようなものである。⁶²⁾ 「高砂」の遣英軍艦報告書は、コーク・ハーバー碇泊については極めて簡潔な描写に終始していて、「浅間」の報告書のような現地との親密な交流の記載がない。両艦は「エンプレス・オブ・インディア」等の英艦が在泊するコーク・ハーバーに入港すると、英国側は「厚意を持って」ホールボーリン島とクインズタウン市(コーヴ市)の間の浮標を両艦用に供すると申し出た。潮の流れもあり繫留の難しい狭い水域での作業となるから、英国側の厚意なのか、日本側の艦船操縦術のお手並み拝見との意地の悪い提案なのかはわからない。「浅間」航海長上村経吉等が帰路香港にて書いた浅間航海報告には、「軍艦錨地ニ於テ『キングス・ハーバー・マスター』乗艦其指導ニ従ヒ『リー』河下流ヲ遡ッテ『クインズタウン』埠頭

⁵⁹⁾ O'Mahony, *The History and Folklore of Carrigaline*, p. 225.

⁶⁰⁾ 装甲巡洋艦「浅間」は、先述の77年に砲術・航海術練習艦となった初代「浅間」(後に「浅間艦」と称される)とは別の艦船である。

⁶¹⁾ 防研、海軍省—公文雑輯—M33-7-281、0392-0414頁。

⁶²⁾ 別途引用するものを除けば、ここからの記載は遣英艦隊関連書類(一)遣英艦隊報告軍艦浅間報告(防研、海軍省—遣英遣米—M35-1-1、0144-0149頁)とオマホニの前掲書の情報に基づく。



コーヴ側から見たホールボーリン島。右奥の水域に2隻の巡洋艦高砂と浅間が碇泊を試みた。

前ニ至リ本艦ハ二番浮標、高砂ハ三番浮標ニ繫留セントセシガ漲潮流ノ為メ之ヲ誤リタルガ故ニ更ニ進ンデ『オイスターバンク』ノ西方河勢湾曲シテ稍ヤ廣キヲナセル位置ニ至リテ投錨漲潮流ヲ利用シテ港口ニ艦首ヲ向ケシモ全河埠頭前の錨地タルヤ一番浮標ニハ英艦『メランパス』四番浮標ニハ『グラスホッパー』ノ繫留スルアリ其間位置狭クシテ我ガ二隻ノ大艦ヲ容ルニハ稍ヤ狭キノ感アリ故ニ全所浮標繫泊ヲ断念シ再ビ軍艦錨地ニ至リ六時左ノ位置ニ投錨碇泊ス」とある。⁶³⁾ 指定された浮標に繫留するに際し両艦が非常な苦勞をしたことが読み取れる航海報告であるが、浅間報告に書き写された地元紙の記事は、見出しで **JAPANESE WARSHIPS: The Assami and Takassago in the harbor, skilful manoeuvring** と掲げ、「浅間」「高砂」両艦の繰りミスはあるが、両艦船員の操船技術を称えて投錨碇泊までの模様を詳細に紹介している。⁶⁴⁾ 浅間報告ではホールボーリン島は、「小規模ナル海運造船廠アルモ単に艦船ノ小修理等」に留ま

⁶³⁾ 明治 35 年遣英軍艦報告浅間艦長 (二) 遣英艦隊軍艦浅間航海報告第 6 (防研、海軍省一遣英遣米-M35-4-4、0418-0420 頁)

⁶⁴⁾ 浅間報告では、同紙で両艦の操船の様子は次のように紹介されている。‘The flagship Assami proceeded first towards her mooring position and following in her wake was the Takassago. Nearing the buoys it was observed that both of the men-o-war were steaming rather too quickly to make fast to them with the result that they missed their mark. Now was given a display of the seamanship and ability of the Japanese, when the vessels were in an awkward position. They backed and then worked their engines ahead in the futile effort to become moored, but each ship missed catching her buoy. The channel being very narrow, there was considerable risk in going ahead and backing, inasmuch as the Point mud bank runs out very far and to this bank the Takassago went exceedingly close, carried by the flood tide, whilst the Assami also went dangerously near to it. However, through expert seamanship on the part of the Japanese both ships succeeded in getting clear, but they were compelled to steam to Monkstown Bay, when they dropped anchor and swung with the tide.’

るとの印象が伝えられている。

翌 21 日午前中に、アイルランド沿岸海軍先任将校のジェフレイ少将 (Rear admiral Jeffries) やコーク地方陸軍司令官マッカルモント少将 (Hugh McCalmont) が「浅間」を訪れ昼食を取る。浅間報告では、「午后水雷艇ニテ『リー』河ヲ廻リ『コーク』ニ赴キ市長ヲ訪問シ其案内ニテ当時開会中ノ万国博覧会ヲ一覽セリ。其日市長ヨリ晚餐ノ饗応ヲ受ル等最モ懇切ナル接待ヲ請ケタリ」とある。そしてオマホニによると、同日午後には Naval commanders がコリンズ兄弟の住むベルビューを表敬訪問したとある。コークとベルビューの距離から考えて当時 2 か所を同じ日の午後には訪問することは難しく、おそらく浅間報告の中でコーク市長及び万国博覧会を訪問したのは伊集院を始め両艦の士官、下士官で、コリンズ兄弟を訪れたのはそれぞれ「浅間」と「高砂」の艦長であった中尾雄、吉松茂太郎の両名ではないかと思われる。オマホニは、この非公式訪問でコリンズ兄弟と訪問者は旧交を温めたと記しているが、中尾は 71 年に海軍兵学校に入学し、ジョン・コリンズが指導者として乗船していた「肇敏」に乗組んだ時期があった。一方吉松は、コリンズ兄弟が英国海軍を除隊後再度日本に戻って教育・訓練活動に従事した 80 年に海軍兵学校を卒業している。英国王立海軍大学で教育を受けた伊集院と比べると、両艦長のコリンズ兄弟との結びつきと兄弟への感謝の念は極めて大きなものがあつたと思われる。両艦が碇泊するホールボーリン島の対岸にあるモンクスタウンの町からコークまでの両艦乗組員の輸送は、コーク鉄道会社 Cork Blackrock and Passage Railway が無賃での輸送を引き受けている。日本からの展示もあつた万博には、この日両艦から 1200 人が訪れたようである。一方、同鉄道会社付属汽船に乗って押し寄せた地元見物人に対しては、両艦は一定の時間内において観覧を許可している。浅間報告にあるように、この日の夜日本側はコーク市長と万博関係者によって饗応を受ける。

翌 22 日、浅間報告では、「市長ノ一行 14 名答礼ノ為来訪艦内ヲ巡覧セシメ午餐ヲ饗ス一同頗ル満足ノ体ナリシ」とある。コーク市長の要請に応じて、午後両艦の軍楽隊は乗組員 400 人とともに博覧会会場を訪れ奏楽を行い地元民から好評を博している。オマホニによれば、乗組員はコーク到着時にコリンズ兄弟の出迎えを受け、乗組員のコーク市内及び博覧会会場のツアーに兄弟も同行しているが、浅間報告にはそのような記載はない。コリンズ兄弟との接触はあくまで非公式なものであり、遣英艦隊の公式行事とは一線を画する類のものであつたから、記載がないのも当然といえば当然である。非公式の扱いを受ける理由の一つとして考えられるのは、兄弟が既に英国海軍の軍籍を外れていたことがあろう。しかし、中尾や吉松のような兵学校出身者にとっては、明治初期の帝国海軍創設期に兄弟が行った様々な貢献は忘れえるものではない。夜 8 時、ジェフレイ少将の招待を受け、伊集院以下、両艦長、上級士官はコーク・ロイヤル・ヨットクラブでの晚餐会に参加する。23 日も伊集院や上級士官はコーク市に出かけ

マッカルモント少将を訪問しているが、夜には「浅間」にて、ジェフレイやマッカルモントを招いて晩餐会が開かれている。結局ヨーク・ハーバー碇泊中に両艦の下士卒は3日間に分けて博覧会を観覧し、浅間報告には、「彼等モ一般ニ好印象ヲ地方人民ニ与ヘタルモノ如シ」とある。ヨーク・ハーバー滞在中の日本側の活動は博覧会見物や饗応だけではなく、「高砂」の記録によると、海軍病院の視察等も含まれていた。23日にボルボルン島（ホールボーリン島のことと思われる）海軍病院を視察した「高砂」乗組員の1人は、「本院ハ規模大ナラサルモ新式建築ニシテ清潔ナリ手術室ハ二階ニアリテ室床板間ナルハ遺憾ナリ。伝染病室ハ本院ト隔離シテ完全地方病院トシテ整頓セリ」と報告している。⁶⁵⁾翌24日両艦はクインズタウンを出航し、カーディフ、リスボン、ジブラルタル、ナポリに立ち寄った後、日本に向けて帰路についている。

その後もジョン・コリンズは、アイルランド救貧法施行のために特設された監視委員会（Board of Guardians）や地区評議会（Rural District Council）において1907年まで活躍している。その間、地区評議会の会長への立候補を打診された時にはそれを断ったが、地区評議会を代表してヨーク州評議会に出席している。ジョンと比べると地域との関わりよりは農業に熱心であったコーネリアスは、1920年に69歳になる直前に死去している。その後ジョンは、肉体の衰えとともに各種催しへの参加は少なくなり、18年経った1939年に88歳の高齢で亡くなる。オマホニの著書にはコリンズ兄弟の紋付き袴姿の写真が掲載されている。⁶⁶⁾その姿は、兄弟がいかに日本に溶け込み愛着を持っていたかを指し示すものである。兄弟が短期間のアイルランド帰国を除けば、1873年から88年までの間継続的に日本に留まり帝国海軍の教師として活躍した事実は驚きに値する。兄弟の英国海軍での階級は当初俊秀水夫という低いものであったが、黎明期の帝国海軍の士官や水兵にとっては、砲術や航海術を始め兄弟が教えるシーマンシップ基本事項のすべてが吸収するに値する高度なものであった。階級の低い兄弟が、叙勲を受けさらに勲位進級までに至った事実は、彼等の人物と教師としての貢献を帝国海軍が十二分に評価し感謝していたからに他ならない。

⁶⁵⁾ 明治35年遣英軍艦報告高砂艦長（三）（防研、海軍省一遣英遣米-M35-5-5、0469-0470頁）

⁶⁶⁾ O'Mahony, *The History and Folklore of Carrigaline*, pp. 218, 228-30.